

百人一首標文庫 全





〇七ノ

百人一首
あまのうた

笑学

一丈女子成

長て化人

の家ハ男

始ハはるあ

なまの男子

もの好あ

天智天皇

秋の田舎

新種乃

唐れ

官をわ

我衣を

病ふれ



山あふふ
 まぐろの毒
 露電しく
 悠小舟ねる
 文け家より
 心もはたふ
 へまの味れ



持統天皇

まゐて

夏さふ

ふ妙乃

夜や

毛の

山く

市も男れ
 教回るまは
 信教くあひ
 男を恨み
 中廻くまそ
 終る追おれ
 恥と涙女



柿本人麿

何れ

心

その

乃

虎の

なぐ

むる

子の母家
かゝるに成
湯ぞと男
夫の熱なる
やうに張る
毛皆女乃
親の病や

山道赤人
田子やう
うち
出て
足通を
白妙若
留士の名根
客やあう



思ひやり

一女を寝るも

人の勝る成

最の心



正月

後九を文

奥山よ

踏みけ

な

麻の

しゑきう時ぞ

秋うあや



諸君夫人を
 公卿より眼
 心くく奇
 て人怒る云
 弟句やあ
 いはらけ
 けこそ余

中納言家持
 鶴のわさる
 をく
 ね乃
 ありきと
 秋ぞ
 更ふ多敷



先王人眼
 娘も秋乃ふ
 清き人清
 知る人清
 里奥なる清
 女乃よ邊
 ねあり女唯

安倍仲磨
 わ油のまら
 ありさけ
 られ
 かよとの
 あまの
 みよこのふは
 いとくはうそ



和も時と
 自然に
 静かに
 一女子の推し
 男子の別
 志くを

秋撰法師
 その意
 まよこの
 人をも



候初も我
 男の序と
 同く其衣
 裳をも同

小野小町
 花の色
 うつりみ
 我方よ



臣

あまの

口
口
口

て

喜
得
奴
也

わさくは園



泰議堂

和田の系

八十

子

子

人又法也。

わまのつり糸



時の感歎此
 極の法を
 ぞくくは
 我々の名
 様一様
 小僧と
 一生身成り

佛法の
 天竺の
 吹く
 ひ女の
 名は



ばふさ
 多のり
 勝
 わる
 父母の
 得物
 さま

陽成院

是か
 意ど
 開と



らび親ま
小夢
今
金
金
金

[illegible]

一掃人交

光孝天皇
君の事
素の世

いづ
わさ
我
雲



和歌集

中納言行平

五

唐文公集

入
と
わ
ら
し

275

卷之四

いふ事あり

走之

あまの

善

つち

分

...



飛史乃象

重義なり

色支子

卷之三

天より我に

三ノ

在恩業奉朝臣

不卑振

祚代也

きりぎりす

孝

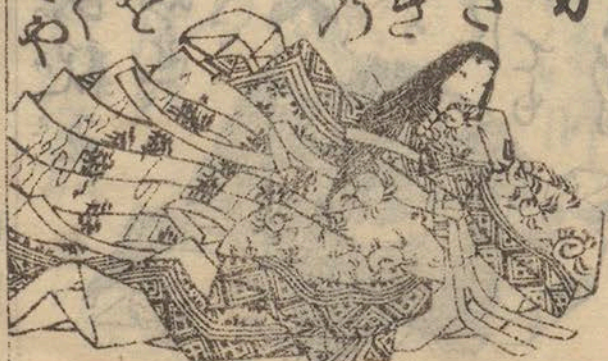
かへて



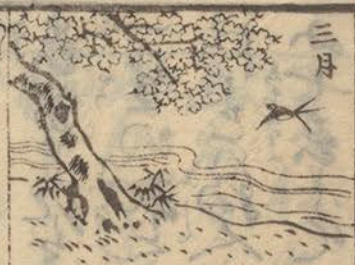
三
 多はたれ
 出たうと
 女ひもび
 嫁しそそ
 家とむろ
 と女はそ
 するのち
 後乃うひち
 人めうく人
 九



聖人の訓
 かりて
 乃そむさ
 去あそ
 一生の恥
 けまふ人
 ふ七玄と
 伊勢
 龍波さ
 うそき
 あしう
 ふるの
 あふも
 せうと
 ぐうや



三月



おたけ七
いりうは
嬢ふ順

元良親王



おたけ七
いりうは
嬢ふ順

おたけ七

いりうは

嬢ふ順

おたけ七

いりうは

嬢ふ順

おたけ七

素性法師

今こむと

いひ

おたけ七

いりうは

嬢ふ順

おたけ七



おたけ七

いりうは

嬢ふ順

文屋康秀
 大いに
 秋意に
 くさ
 きの
 大はる
 むい
 わりと
 同姓の子
 は
 好む
 然るに
 婦人の
 長



四月
 大に千里
 月
 物
 う
 我
 好



菅家
大のそび
わさえ
う
あむ
手向ふ
りみぢなほき
神乃まひ

菅家

大のきひ

物之元

子

王

りてちりて

仲乃まふ

疾やまひわさへさる去

六の多光

情なく抱ふ

すゑ
老人
子

三

かり
家
れ

あなれは

三條右大臣

か
あ
あ

わぶさう

卷

法祿

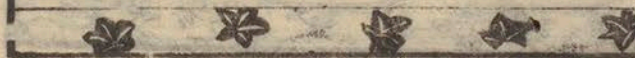
人は志で

今より



七つは
 お返しを
 わけいまい
 七去々み
 女一人の
 嫁して家

負信公
 小倉山
 りみち
 心わ
 今一を
 河津



船令ふさび
 乃そよ遠い
 て大なる
 あり

中絶云
 兄乃東
 かぐ
 いづみ
 病しるん





孝成の理
ありされも
まれ家より
てはあつ男
娘はあつ
ゆき人ど
あつ男と



教へ孝乃
 とていへ
 親れ方と重
 ト男の方と
 将どれし
 なま男姑
 はあおの
 女の方



兄のしと
 角の男
 姑の方の
 ひき業
 意へく
 若男
 何とて



て貴うへ
 弟は男
 姑は男
 女は男
 りは男
 ものをも

春道列樹
 山は風の
 けはる
 ぬる
 かう
 ぬる
 ちる



て貴うへ
 弟は男
 姑は男
 女は男
 りは男
 ものをも

紀友則
 久う
 のど
 ちる
 ちる
 ちる



仕女は後
中好なり
一婦人の
吏と多し



友なり
松もむの
人にて
女は乃
友なり

仕女は後
中好なり
一婦人の
吏と多し



友なり
松もむの
人にて
女は乃
友なり

文の對する
 小顔色とし
 素直さひ
 熟練の強
 里和の多
 能く不慮に
 して不慮に



清惠深養父
 夏の秋を
 青のまじり
 のら
 のゆると
 雲のいつとみ
 月をともす

文の對する
 小顔色とし
 素直さひ
 熟練の強
 里和の多
 能く不慮に
 して不慮に



文屋胡康
 秋の秋を
 のら
 のゆると
 雲のいつとみ
 月をともす

月七



難
 史
 中

右近
長
力
お
ち
人の
今
あ
あ



卷之八

あさむねの
泰織等

普

道

とせりなり

來
腰

五世

恭錄

あさむねの

をの

三

夢

のまゝてかじ

人乃己也



驚^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}
 驚^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}
 驚^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}
 驚^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}き^{おどろ}

清原元輔
契二九

神子

志や

子來の松山
しらいのまつやま

なごころとわ



中

其

寫之

曉くすべ

男たのふ

懐中電燈

親睦

中納言敦忠

わひえての

後乃

七

く
せ
む

ひ
う
り

あめさうり



まへに侍る
 の見様と厚
 く教ふを
 我兄房と
 一様妬乃ん
 好く教ふを

中納言朝忠
 わふ事の
 絶て
 中
 人
 うみづは



かき書
 好く教ふを
 一様妬乃ん
 好く教ふを

後徳公
 人
 身
 かりぬきうか



都吏錄

曾祢好德

卷之五

四九

物之為美不

2

美過有公

子方

後氏和

如

卷之四

切來也

卷之四

無乃主



疎

五夢注

怒
六
支
增

人定勝天

心後まれ

志行進

人知

やま

潘氏

子以

必氣色清

人主

くしをい

秋八來不



わげとまよ
さち
運ひかき
あそび



源重之
風をいふ
かみ
おれ
うへ
おれ

一
云
家
子
傳

多^{おほく}くす^くす^くす^く
に^う能^うも^も人^に
と^{さう}誠^{しん}の^のと^と云^い
あ^あう^うも^も人^に
の^の後^ごと^と云^い
あ^あう^うも^も人^に

大中小鉢室期片

新垣 ちんきり

晴土の

火乃

教はり

ひさかた

のてそ



修人傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳
 祐之傳

藤東義孝
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま



一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常
 一女常

藤東実方
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま
 君がま





文彦が初
 て人の夢
 へつまる所
 には業を
 因を解りふ
 けがしに
 一重観ふの



俄同二司母
 玉のれいの
 けり末
 まては
 かさ通
 多城
 命とを
 のか

とふ述ひ
 神佛を
 有様新
 登るに只
 人間の勅を
 うする時を
 禱はてを



大納言公任
 凝乃香を
 久く
 ありぬ
 名を家述て
 松波えなれ

十月



神仏あり

みづー

一人はまゝと

和泉式部

わづらひ

おの世の

あひやみ

今一むの

わづらひ

の那



成るはまゝ

と保べー

まのひひ

く教たれ

と都を破る

万事儉い

を夢と作

紫式部

わづらひて

みーや

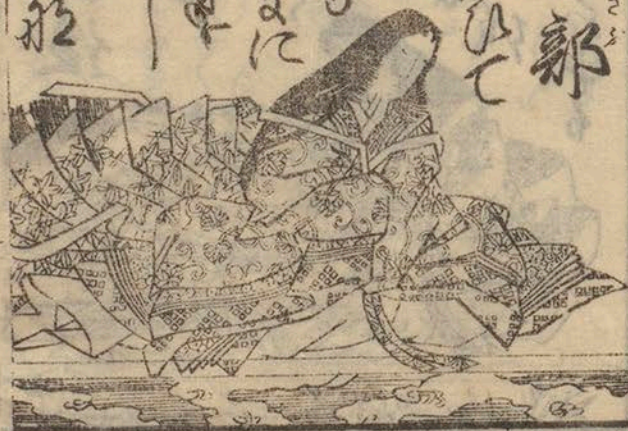
そとへも

とくねまに

空かき

秋の

月



庵うきを衣
 彼飲食をど
 も多れか泥
 うきをさび
 用ひく審
 一美死と云



丈の程に友
 草下新おれ
 美を男ふ
 お解るあ
 裕り近月へ
 うき男た
 隔をかき



一人は有り
まゝにあは
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ
あゝあゝ



十月



左京大夫道雅



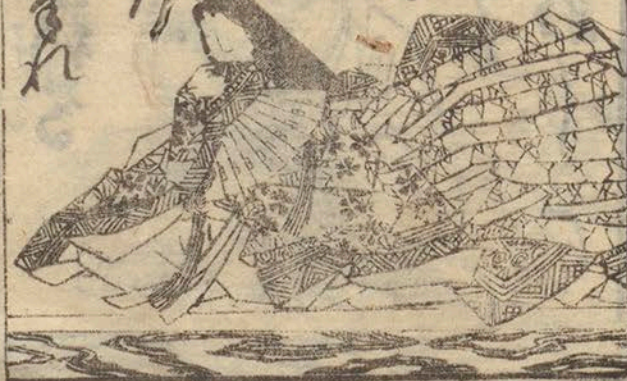
夢のあはれも
 まづまのまを
 動もて次ふ
 夢のあはれも
 はむぐ
 まのまを
 まのあはれも

陰中絶ちて
 舟のまを
 舟のまを
 舟のまを
 舟のまを
 舟のまを



夢のあはれも
 まづまのまを
 動もて次ふ
 夢のあはれも
 はむぐ
 まのまを
 まのあはれも

相換
 夢のまを
 夢のまを
 夢のまを
 夢のまを
 夢のまを



日多秋も
 男姑と大切
 孝
 乃とあはれ
 嫁して後を
 家親の家
 りとと縹

天徳はれ
 りとあはれ
 おり
 山橋
 花より
 なる人
 なる人



ちとあはれ
 て仇のあはれ
 大瓶の修成
 妻のあはれ
 同族かんてし
 子とあはれ
 名はる事

周防内侍
 妻のあはれ
 手はる
 ういあはれ
 名はる



と傍く横

かきくも

一十初陽多

六玉川



三條院

くろく

わく

うた

世

かきくも

意し

秋の月



めはく

あはく

うき

あはく

あはく

あはく

あはく

あはく

能因法師

わく

あはく

あはく

あはく

あはく

あはく

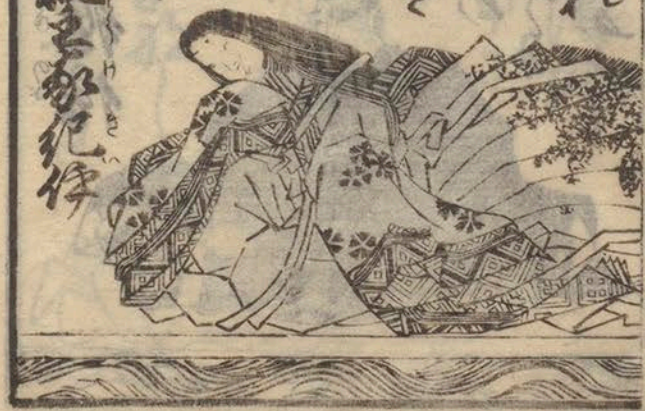
あはく





ふん派利
 庵云甲斐
 あまこ福と
 あうあう
 てあう
 ん所ああ
 りとくは

し我れ
 袖の福を
 うけと
 わこた
 えぬ乃
 まるの
 善にさく
 祐子内親王紀傳



あまれ
 男は小姑
 とあま
 ぬまわさ
 桜小清り
 せてま
 てまの

さきのもうな
 前中納言匡房
 寺砂の
 尾上乃
 こころ
 嘆
 おふの
 そふも
 わふも



母の婦人
 もいふ家
 くく是と
 伝てハ必
 恨て出来
 字元来
 まの家を



源俊頼
 うつて
 人
 まの
 山
 まの
 いのね

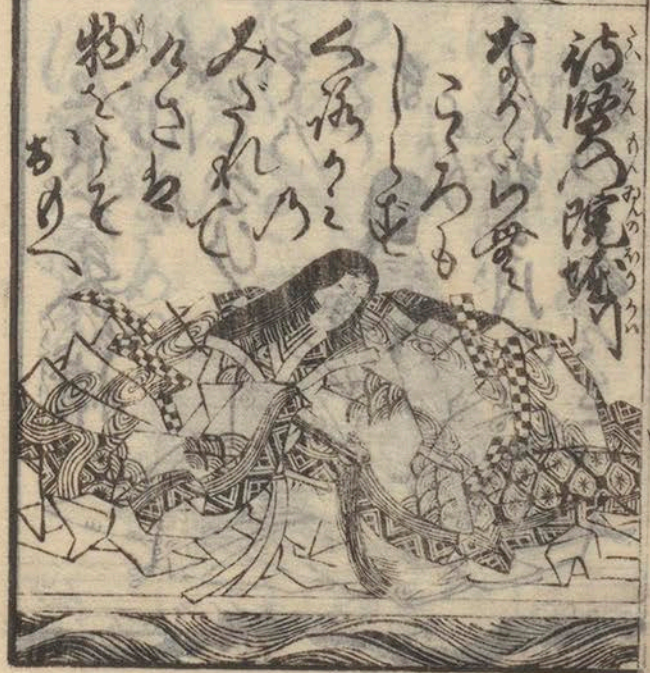
皆人あま
 恨て出来
 安一様
 中女の
 して大切
 新男小



藤原基俊
 契と
 うさ
 つと
 今
 われに
 秋



新玉川
静かなる
心もよ
らばわ
る



静かなる
心もよ
らばわ
る
物と
ちり

静かなる
心もよ
らばわ
る
物と
ちり



静かなる
心もよ
らばわ
る
物と
ちり

妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻
 妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻
 妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻

道因法師
 おのひもむ
 ことえ
 命を
 わる
 めと
 うまふそ
 なうそ
 ありそ



妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻
 妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻
 妙法蓮華
 經の巻
 第一の巻

宣旨后太子俊成
 世の中よ
 うちを
 なうれ
 おい
 つる
 山のあつも
 麻ぞわくかる



病々々々々
順々々々々
怒々々々々

千鳥玉川



若菜清補朝臣



今々々々々
今々々々々
今々々々々

人々々々々

妖々々々々

三々々々々

み疾々々々

み七八々々

何々々々々

の男々々々

後法法師

物々々々々

何々々々々
何々々々々
何々々々々





目もろく
 龍もろく
 らん又人の成
 べきは成る
 毎も成る
 我も成る
 ちる事

意もろく
 才もろく
 一教もろく
 かりの
 龍波



ちる事
 毎も成る
 我も成る
 らん又人の成
 べきは成る
 目もろく
 龍もろく

式子因親王
 玉の法よきをかへ
 ちる事
 毎も成る
 我も成る





所志むい
 令是も男
 天は彼女
 地は我女
 子我女
 何れも女
 是も女



漢方
 家
 女
 女
 女
 女
 女
 女



是れを過
 と何れも重
 人々を驚か
 せしむる
 小僧はまたも
 腹を腹系

泰雅雅經
 みよしの
 林風
 さそ
 ぬるさそ
 夜ふけなり



是れを過
 と何れも重
 人々を驚か
 せしむる
 小僧はまたも
 腹を腹系

泰雅雅經
 みよしの
 林風
 さそ
 ぬるさそ
 夜ふけなり



連をひて家の
内様をへ
七條新時
うねりて又
書きたる候
あはれとて
しるは金銀

入道前大政大臣
むさそふ
わりの
庭乃
雷か
なり
けり
我なりたる



かきつる衣振
あはれとて
くまへと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと

権中納言定家
おねんと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと
あはれと



いかに電る
あやめ
のふゆ子乃
おき
親なる人あ
まひ
理と知らん
ばわづらひ

とくが、
女学館

順德院

百餘年

親なる人のあ

理之知者

いわざるべ

女學紀

表の
むらさき
むらさき



女中毎々封下

消息 繰文より小二枚より一を文に一枚より小繰文にす
一枚より小より用ひ紙紙ありうに文に一枚より小繰文にす
さへふうより用ひ紙紙ありうに文に一枚より小繰文にす

三

野
維

一

天保十五年

東都書碑

西村源六

